61.1.7 日本農業新聞

（第三種郵便物認可）

ミニ独立国 新春にほえる

大阪で初の「万博」

日本のミニ独立国は新年を迎え、ますます意気軒高。年明け初の"仕掛け"は、初の「万国博覧会」開催。三日から八日まで大阪市阿倍野区の近鉄百貨店アベノ店を会場に、お国自慢を披露。駆けつけた三十九か国の首脳が"わが国への亡命を"と国民に呼びかけるなど、ユーモアとパロディーで貫きながら、心豊かな生き方の再発見をアピールしている。

新年早々、万博会場で国民に"亡命"を呼びかけるミニ独立国首脳

パロディーたっぷり 39か国

"遊び、ふるさと、再発見"をテーマに始まった、ミニ独立国の「第一回万国博覧会」。つくば万博の人波を再現し、トラフィーバーにわく浪速っ子に、ふるさとに肌で接する"お年玉"をプレゼントした。

「日本に、こんなユーモアやこんな心の田舎もあったのか」と、心豊かな生き方を再発見できる機会を国民に、と遊び心で独立国三十九か国が連携しての催し。パロディーとユーモアに満ち、その名も「エキスッポ'86」。シンボルマークは「へのへのもへじ」。

会場は、テーマ館、ミニ独立国館、万国グルメ館、万国ツアー館が四方を囲み、中央にはお祭り広場も。入場無料がきいて、隣接の写真展を閑散とさせるほどの人の波だ。田舎の味を求めて各国の農産物、海産物、民芸品を買いあさる主婦、国紹介のパンフレットを集め回る小学生……。万博協会事務局は一日五万人、六日間で三十万人の入場者と強気の読みをしていたが、「かなりいけそう」と、ソロバンをはじく。

一㍍五十㌢の積雪を抜け出し、ジャガイモを持ち込んだ北海道倶知安町の「クサダ・ラーケ共和国」の佐々木栄大統領は、防寒ぐつのなかでむれる足を我慢しながら、北海道の大地の味を声を枯らして売り込み。「デパートに手数料をとられ、もうけにはならない。でも、こんな国があることを一人でも多くの人に知ってもらいたい」と、PRに汗だくだ。

地元・大阪の「そやんか合衆国」の北浦浩大統領は、三百三十人の中から、じゃんけんで選ばれた十人のコンパニオンと共に接客に大忙し。人垣に押され気持ちもたかぶり、主催者を代表して「日本国民と親しく一堂に会することは喜ばしい。一致協力して世界平和の一助に」と"万博宣言"をした。

「ぜひ亡命を」

各国首脳が年賀状

東京サミット（先進国首脳会議）は五月初旬に開かれるが、これより一足早く五日、ミニ独立国の首脳が大阪に集まった。この「第一回万国博覧会」に集まった元首、国王、大統領、女王……ミニ独立国首脳の面々は、貿易摩擦や軍縮など、きなくさき抜きで、米ソ首脳のメッセージ交換ばりに、年頭の所感を交わし、国民に対して「わが国へぜひ亡命を」と呼びかけた。

各国首脳のメッセージのいくつかを集録すると――。

▽ぼけない国（東京都）「フランスで足腰をきたえよう。今年は"ぼけない神社"もつくります」

▽みやんじょチクリン村（鹿児島県）「タケとかぐや姫の里に磨きをかける。かぐや姫のような女性よ来たれ」

▽オリーブ王国（香川県）「四国に税がないため、日本から見離されつつある。更には徒党を組んできてください」

▽アルコール共和国（新潟県）「物が栄え心が荒廃してはだめ。日本がいやになったらいつでも来て、笑いを」

▽千葉いきいき王国（千葉県）「百五十㌶の農地を開墾、無農薬で作物を作っている。ヨーガ道場も造る。集団亡命を」

▽秋田カエル村（秋田県）「人間よ自然に帰れ、だよ。ガスも電話も水道もない村で、人間回帰してみませんか」

▽クサダ・ラーケ共和国（北海道）「中曽根さんの後は任せて。屯田兵のように、都会のジャングルを開墾していく」

ミニ独立国のこうした派手なアクションについて、識者はどう評価しているのか――。農政調査委員会の松浦龍雄専門委員は「独立国の多くは離島や過疎村に誕生している。産地間競争とは縁遠い所で、行政や補助金の対象にもならない。つまり、開き直りのパフォーマンス」と分析する。

開き直りがいい

また、各国の交流哲学について「価値感の逆転を狙っているのが共通点。面白いことをくそまじめにやっているのも特徴。今の世相とは逆だが、実際には常識の文化を追求している」とみる。健康、安全、本物に"こだわる"哲学も持ち合わせているという。

こちら特報班

NO.20